

図書館を活用した授業デザインの研究 : ビブリオバトルを利用した教職協働授業の試み

著者	藤 勝宣, 坂田 絵里奈, 原田 佳子, 島浦 一博
雑誌名	九州国際大学教養研究
巻	23
号	2
ページ	113-140
発行年	2016-12-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1265/00000654/

図書館を活用した授業デザインの研究

ビブリオバトルを利用した教職協働授業の試み

藤 勝宣・坂田絵里奈
原田 佳子・島浦 一博

はじめに

本稿は、ビブリオバトルという方法を利用した授業実践、しかも教職協働による授業実践の試みに関する考察である。ではなぜ、いまビブリオバトルなのか。また、なぜ教職協働なのか。こうした疑問に、私たちの授業実践の経緯を述べることによって最初にお答えしておきたい。

そもそも筆者の藤がビブリオバトルに接したのは本学（九州国際大学）図書館の方々からの呼びかけによってであった。本学では、入学直後の1年生に学内をよく知ってもらうためのイベントのひとつとして図書館ガイダンスというものが行われている。1年生の必修科目である入門セミナーにおいて、春学期の早い時期に、図書館の職員の方々が図書館の色々な使い方を学生にガイドしてくれるのである。我々教員は学生を図書館へ引率して行くだけでよく、あとは、図書館の職員の方々が、図書館に親しみ、図書館の利用法になじませるために、様々なゲーム形式で学生を指導してくれる。この点において、すでに教職協働の態勢は少しずつ準備されていたといえるだろう。

とはいえ、そのようなガイダンスを行っているにもかかわらず、現実には、図書館の利用者数は伸びず、多くの学生が図書館へ行くことはなかった。そこで、このような状況を打破しようと立ち上がったのが島浦図書館長である。島浦教授は、当時、一般に広がり始めたビブリオバトルに着目し、これを大々的

に導入することによって学生を本や図書館に親しませようと企図した。

一方、教員の側も、学生の本離れを深刻な問題だと受け止めていた。読書は、あらゆる知的活動の基礎であるにもかかわらず、学生は興味を示さない。筆者の属する法学部の入門セミナーの場合、春学期と秋学期の終わりにはゼミ対抗のプレゼン大会が開かれるのだが、教員が強く指導するにもかかわらず、学生は主にインターネットからの情報に頼りながらパワーポイントを作成しがちであった。そこに、読書という要素を介在させるのは非常に難しいことであった。

さらに、現在のアクティブ・ラーニングの流行である。文部科学省の旗振りのもと、まずは高等教育の現場にアクティブ・ラーニングの荒波が押し寄せてきた。それが中等教育以下に波及していったのは、周知の通りである。しかし、このアクティブ・ラーニングには大きな問題があった。というのも、十分な知のインプットを伴わないアクティブ・ラーニングは知的レベルの低い自己満足に墮してしまうからである。なるほど、アクティブ・ラーニング形式を導入すれば、学生はある程度は自主的に活動する。しかし、それは活動内容の知的レベルの質を保証しないのである。そもそも学生の知的レベルが高い場合は別として、学生が自主的に活動するためには所与の学生の知的レベルから出発しなければならず、そうなると学生の活動と教員が希望する知的レベルとの落差が非常に大きくなる。その懸隔を埋めるのは相当困難なことであり、この難問の前に私などは途方に暮れていたというのが正直なところであった。

こうした状況の下で、図書館長を中心とする図書館職員の方々からのビブリオバトル実施の呼びかけは、まさに暗闇に一点の光明を見出したようなものであった。学生が自ら進んで選択した本を読み込み、熟考したうえで、その魅力を自分の言葉で、その本を知らない他者に伝えるという行為は、まさにアクティブ・ラーニングそのものでありながら、しかも、アクティブ・ラーニングの結論が陥りがちな学生の独善的な空想の世界からは離脱しており、まずは本という客観的な知的世界へ導くことによって、学生たちの知的レベルを確実に向上させることを可能にするように思えたからである。

以上は、あくまで筆者の藤が主観的に振り返ったこれまでの経緯であるが、いずれにせよ、演習という授業の中でビブリオバトルを活用しようという流れは着実に増し、本学では多くのゼミが教職協働の形でビブリオバトルの手法を活用するようになった。私は、あくまでそれらの中の一担当者に過ぎないが、図書館職員の方々が主なファシリテーターとして展開されるビブリオバトル及びそれへ至る緻密な計画と教育実践に協力しながら、これはぜひ記録及び実践的考察として残しておくべきだと考えた。そこで、図書館職員の坂田さんと元図書館職員の原田さん、さらに島浦図書館長に相談したところ、私立大学図書館協会研究助成報告書(「教職協働で作る学習支援 ビブリオバトルの手法を活用したグループワークと読書ノートの構築」)に書き残したこともあり、共同執筆をご快諾くださった。こうして、以下、1～4の本論を坂田さんと原田さんに、そして、「おわりに」を島浦教授にお願いして分担執筆していただいたという次第である。本論考が、図書館を活用した授業改革の試みとして、さらに教職協働の形式によるアクティブ・ラーニングの有効化を目指した授業の実践記録・考察として、今後の授業改善をめざす方々にとって、少しでもお役に立てば幸いである。

1. 九州国際大学図書館の現状と課題

本学では教育目標として「一人を育てる。一から育てる。」を掲げ、教職協働での学修支援に取り組んでいる。これまで本学図書館は教育・研究に必要な資料の収集、整理、学術情報の提供、整備を中心としていた。近年では、学生の図書館活用の向上を目指し、情報リテラシー教育にも力を入れ、図書館ガイダンス(入門編)やより高度な情報検索演習なども実施している。

入門編にあたる図書館ガイダンスは1年生の必修科目である入門セミナーの時間において実施しており、授業の一環とすることで受講率は高い。実施クラス数(表1)からして、1年生のほぼ全員が受講できている。しかし、ガイ

ダンス以後に図書館を活用している学生は少数であり、学生自身が図書館の活用や読書の必要性を感じていない傾向にある。教員も授業演習等で、図書館の施設や資料を活用した課題や指定図書などを提示しているが、数名の教員と意見交換をしたところ、思うような成果はでていないようだ。デジタル世代の学生にとって、携帯電話やスマートフォンがあれば情報収集はたやすいのかもしれない。しかし、大学生（社会にでるための準備期間）の間に読書を通して知識を増やし、教養を高めていくことは、社会に出て、より豊かな人生を送れるようになるために必要不可欠なことではないだろうか。

なお、本学図書館の閲覧基本統計として利用状況は表2、3に示す通りである。

入館者数は増加傾向にあるが、貸出冊数は多少の変動はあるものの減少している（入退館ゲートシステムの仕様で利用者種別は識別できない）。

表1 入門セミナー における図書館ガイダンス実施状況

2012年度	2013年度	2014年度
30 / 31	26 / 28	26 / 27

実施クラス / 入門セミナー 全体数

表2 利用状況（入館者数・貸出冊数）

	2012年度	2013年度	2014年度
入館者数(学内) 教職員含む	64,461人	65,680人	67,543人
貸出冊数 (学部生)	3,727冊	4,085冊	3,403冊

表3 学生一人あたりの貸出冊数

学部・学科	年度		
	2012年度	2013年度	2014年度
法・法律	1.4冊	1.23冊	1.17冊
経済・経済	0.95冊	1.26冊	1.28冊
経済・経営	1.51冊	1.79冊	1.24冊
国際関係・国際関係	3.73冊	4.49冊	3.87冊

次に、本学図書館の抱える課題は大きくわけて2つある。1つ目はアクティブ・ラーニングや課題解決型学習等、近年の新しい教育手法を取り入れた学修支援をおこなうこと。2つ目はラーニングコモンズをはじめとする学修環境の整備をふまえた図書館の役割や機能の変化に対応し、独自性や専門性を打ち出していくことである⁽¹⁾。

このような課題を認識しつつ、学生が図書館を活用し自発的な学びや本を読む習慣を作るための具体策を検討していたところ、次章で述べるビブリオバトルの取り組みが全国的な広がりを持つようになってきた。

2 - 1 . 2013年度ビブリオバトルの導入をめぐる

大学図書館を中心として、2011～2012年頃からビブリオバトルの取り組みが全国的に広がってきた。ビブリオバトルとは「本を通して人を知る、人を通して本を知る」がコンセプトの本を媒介としたゲームであり、公式ルールは以下の4項目となっている。

- (1) 発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる。
- (2) 順番に一人5分間で本を紹介する。
- (3) それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行う。
- (4) 全ての発表が終了した後に「どの本が読みたくなったか？」を基準とした投票を参加者全員1票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする⁽²⁾。

また、ビブリオバトルの機能として以下の4つが挙げられている。

- (1) 「参加者で本の内容を共有できる」(書籍情報共有機能)
- (2) 「スピーチの訓練になる」(スピーチ能力向上機能)
- (3) 「いい本が見つかる」(良書探索機能)
- (4) 「お互いの理解が深まる」(コミュニティ開発機能)⁽³⁾

本学でも2013年度からビブリオバトルを使った学習の導入を検討し、当初はイベントとして計画をしていた。しかし、図書館長、図書館職員、学生スタッフ有志で練習会や打ち合わせを重ねた結果、ビブリオバトルを教育活動の「ツール」として活用し、授業で取り入れ、先に述べた本学図書館が抱える課題にチャレンジしていく方針に転換した。授業として図書館ガイダンスと連動させ、ガイダンスの案内と同時に、本学の初年次教育科目である入門セミナーの担当教員を中心に試験的な取り組みとして、ビブリオバトルを授業で取り入れることを提案した。数名の教員が興味を示し、その結果、2013年度春学期に実施したクラスは3クラスであった。

ビブリオバトルの発表準備として、読書の習慣がない学生、人前での発表に慣れていない学生へのフォローのため、読んだ本の内容や感想を記入して構成を立てることを目的とした「レジュメシート」を作成した。使用した学生には、本の簡単な内容や感想をレジュメシートに書くことで思考の整理につなげることを特に意識してもらった。また、記入の際は図書館職員が書誌事項の確認の仕方や著作権、引用ルールなどを解説している。この点では情報リテラシー教育の一助となり、図書館独自の学修支援と言えよう。

ビブリオバトルを授業として導入するには、実施回ごとの内容や目標を明確にする必要があるため、基本となる実施パターンを作成した。

<2013年度の基本となる実施パターン>

第1回 デモンストレーション・本探し

ビブリオバトルで紹介する本はゼミの目的によって制限をかけた。

例えば読書推進とプレゼン力をつけることのどちらに重点を置くのかによってジャンルの制限をかけた。

国際関係学部：ハウツー本、絵本、ドラマや映画の原作本（ただし、映像作品を見ていなければ可）は選択の対象外とした。

経済学部の一部クラス：制限なし（漫画も可）あらすじや本の魅力を人にわ

かりやすいように話すことができれば可

第2回 発表準備、発表練習1

レジュメシートの作成

書誌情報の確認、本の内容を整理する、自分の考えをまとめる、精緻化の練習。

発表練習(1)

グループ内で3分間。時間を体感してもらい、人前で話すことに慣れてもらう。

宿題

レジュメシートの作成、話す内容を考えてくる。

第3回 発表練習2、改善点のフィードバック

発表練習(2)

グループ内で5分間。

改善点のフィードバック

お互いの発表の良かった点・改善点をメモし、フィードバックしあう。

宿題

最低1回は発表の練習をしてくる(5分間話す)

第4回・5回

クラスを前半・後半に分けて2回にわたり発表、ゼミ内ビブリオバトルの実施。

2 - 2 . 2013年度試験的取り組み後の振り返り

第1回目を選んで本を読むんでくることが前提であるが、本を読んできていないことも多々あり、そのため、授業時間中に読書の時間を設けるクラスもあった。1冊の本を読み通した経験が非常に少ない学生もいた。そのような学生には、まず目次を見てもらい、一番興味が持てそうな章を選んで読んでみるよう勧めた。読書経験の少ない学生は小説ではなくハウツー本や著名人のエッセイ

を選んでいることが多かった。また、本学で初めて正課授業内でビブリオバトルを行った2013年度は、多くの学生が5分を使いきることができなかった。発表時間を測ったクラスでは、3分以下：2名、3分～3分30秒：7名、3分30秒～4分：5名、5分：2名といった結果であった。

発表の構成を考えるシートとしてレジュメシートというワークシートを使用した。レジュメシートの作成だけでは、5分間話す内容がまとまらず、そもそもどんなことを書いてよいかわからないという学生もいた。

参加した学生の全てがビブリオバトルに好意的だったわけではない。しかし、取り組んだ教員からは「ビブリオバトルは授業で使えるのではないか」「イベントとして実施しても面白い」といった意見があり、学内におけるビブリオバトルの取り組みは徐々に認知されていった。具体的には、2014年度は国際関係学部入門セミナー の全6クラスでビブリオバトルに取り組んでもらった。イベントとしては経済学部の企画として高校生、保護者の方を観客にオープンキャンパスで実施した⁽⁴⁾。

2013年度の試験的な取り組みを一過性のもので終わらせず、より良い学修支援につなげていくため、私立大学図書館協会研究助成に応募した。

3 - 1 . 2014年度私立大学図書館協会研究助成を受けての取り組み

2013年度の試験的な取り組みをふまえ、授業デザインの研究や図書館を活用した学修支援をおこない、ビブリオバトルを活用した授業がより良い教育活動となるよう、2014年度私立大学図書館協会研究助成に応募し、採択された。研究助成タイトル：「教職協働で作る学修支援 - ビブリオバトルを活用したグループワークと読書ノートの構築 - 」(本稿では分量の関係で読書ノートについては割愛する)

2013年度の試験的な実施と同様に、まずは入門セミナー での取り組みを促進するため、入門セミナー における図書館ガイダンスと同時に、新規事業

の実践研究として案内をした。はじめに、基本となる実施パターン（授業デザイン）を作成し担当教員向けに説明会を開催した。説明会で教員から出た意見を反映し、基本となる実施パターンをクラスごとにカスタマイズした⁵⁾。

実施パターンの作成にあたっては、入門セミナー のスケジュールの中で他の学修内容への取り組み時間も考慮し、授業の予定が組めるよう、発表を含めて5回で1セットのパターンを作成した。詳しくは表4の通りである。第1回目にビブリオバトルの説明とデモンストレーション、本選び。第2回目、3回目に発表準備。第4回目、5回目をゼミ内での発表とした。この5回をパターン化し、ゼミ担当教員の希望によって回数を変更したり、内容をカスタマイズした。

2013年度の取り組みにおいては、本学図書館作成のレジюмеシートを使用したが、本研究活動においては、思考プロセスの可視化、論理的な説明力をつけることを主な目的として、国際関係学部松井教授が作成した「原稿作成シート」を併用した。ビブリオバトルの公式ルールでは、レジюмеなどの使用は禁止とされている。そのため、ワークシートや原稿作成シートはあらずじや感想をまとめるためのツールとして位置づけ、発表をする際は公式ルールを順守した。

また、毎回ビブリオバトル用のミニッツペーパーを記入してもらい、次回でフィードバックを行った。ビブリオバトルを使ったワークでは、図書館職員が進行役を務めた。また、学生が発表準備をする際には、教員、図書館スタッフ、図書館 SA がアドバイスをした。学期初めにワークを開始したクラスは、2013年度にワークを経験した職員2名が進行役を担当し、その他の職員に随時見学に入ってもらった。その後、実施するクラスのスケジュールを作成し、クラスごとに担当を割り振って実際に授業に入りながら、図書館内で研修を行った。

表 4 実施パターン（授業デザイン）

回	学習活動	内容	目的	目標
1	デモンストレーション（30分～40分） 本探し（30分）	担当教員、図書館職員、SA等のデモンストレーションを観る。 図書館ガイダンスの復習（パソコンを使って本探し）	ピブリオバトルはどんなものかを知る。 本を探ることができるようになる。	ピブリオバトルを理解する。 読みたい本や紹介できる本を見つける。
2	レジュメシート、原稿作成シーートの作成（40分） グループワーク 発表練習（30分）	紹介する本の説明を考え、文章化する。 グループの中で3分間の発表練習。	本の情報を整理する。自分の考えをまとめる。 少人数の前で話すことに慣れる。時間を体感してもらう。	奥付の情報や引用ルールを理解する。 本のタイトルや著者、選んだ理由などを話してみる。
3	グループワーク - 1 発表練習（40分） グループワーク - 2（30分）	グループの中で5分間の発表練習。 グループメンバーをシャッフルして話す。	5分の時間感覚をつかむ。本番に向けて内容や発表の仕方を修正する。 グループで紹介された本や著者の情報を伝える。人の発表で良かった点を共有する。	ピブリオバトルの練習、人の発表を聞いて良い点、改善点を指摘する。 人の発表で良かった点を自分の発表に生かす。
4	ピブリオバトル本番（70分）	公式ルールに沿った形で本の紹介をする。紹介5分 + 質問2分 × 人数	取り組みの成果を表現する。	本のあらすじや考えたことを人に分かりやすく伝える工夫ができるようになる。

毎回すること：ピブリオバトルミニッツペーパーの記入（授業終了10分前）

1、5回目ですること：事前、事後アンケートの実施（授業終了10分前）

表5 各回の宿題

回		目的
1	読書（気になった箇所が付箋紙を貼ってくる）	・本の中でどの部分に焦点をあてて話すか候補を探す。 ・次回授業の際、ファシリテーターがアドバイスをしやすいようにする。
2	レジュメシート・原稿作成シートの作成	・本のあらすじをまとめ、読んで感じたことを言語化する。
3・4	最低1回は発表の練習をしてくる	・時間感覚をつかむ。 ・原稿の棒読みではなく、聴衆を意識した発表をする。

この実施パターンをゼミ担当教員の希望によってカスタマイズした。2014年度にビブリオバトルを実施したのは全部で17クラス、学部・学年の内訳とカスタマイズした内容は下記の通りである（カスタマイズした個所は下線で示している）⁶⁾。

【法学部】1年：1クラス/10クラス中（入門セミナー） 2年：1クラス（基礎演習）

【経済学部】1年：6クラス/11クラス中（入門セミナー） 2年：1クラス（経済演習） 3年：1クラス（総合演習）

【国際関係学部】1年：6クラス/6クラス中（入門セミナー）

【学部・学年混合】司書教諭用科目：1クラス

表6 グループワーク内容一覧

学部・学年	授業名	授業回数	グループワークの内容	授業の進行・シート作成の助言者
法学部 1年生	入門セミナー	5回	デモ、本選び、レジュメシート、 原稿作成シート レジュメシート、原稿作成シート、 3分発表練習 5分発表練習 ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 入門セミナー 担当 教員 図書館 SA 入門セミナー SA
法学部 2年生	基礎演習	6回	デモ、本選び、レジュメシート 原稿作成シート、3分間発表練習 5分間発表練習、発表分析カード、 原稿作成シート	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 基礎演習担当教員

図書館を活用した授業デザインの研究

			リハーサル（全員の前で5分間発表練習） ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	図書館 SA
経済学部 1年生	入門セミナー	6回	デモ、本選び レジュメシート、原稿作成シート、 3分間発表練習 原稿作成シート、3分間発表練習 5分間発表練習、発表分析カード、 グループディスカッション（改善点の指摘） ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 入門セミナー 担当 教員 図書館 SA 入門セミナー SA
経済学部 1年生	入門セミナー	6回	レジュメシート、原稿作成シート レジュメシート作成、3分間発表練習 原稿作成シート、傾聴力体験 傾聴力体験、5分間発表練習、 グループディスカッション（改善点の指摘） ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 入門セミナー 担当 教員 図書館 SA 入門セミナー SA
経済学部 1年生	入門セミナー	6回	デモ、傾聴カプリント配付、本選び デモ3分、傾聴力体験、レジュメシート、原稿作成シート レジュメシート、原稿作成シート、 3分間発表練習 5分間発表練習、発表分析カード、 グループディスカッション（改善点の指摘） ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 入門セミナー 担当 教員 図書館 SA 入門セミナー SA
経済学部 1年生	入門セミナー	8回	デモ、本選び 読書タイム、レジュメシート レジュメシート、原稿作成シート、 読書タイム 原稿作成シート、3分間発表練習 原稿作成シート、3分間発表練習、 発表分析カード 原稿作成シート、5分間発表練習 ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 入門セミナー 担当 教員 図書館 SA 入門セミナー SA

経済学部 2年生	経済演習	5回	デモ、本選び レジュメシート、原稿作成シート、 3分間発表練習 5分間発表練習、発表分析カード、 グループディスカッション（改善点 の指摘） ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 経済演習担当教員 図書館 SA
経済学部 3年生	総合演習	3回	ループリック作成 3分間発表練習、ループリックで 相互評価、発表内容修正、5分間発 表練習 ビブリオバトル本番	【進行・助言】 図書館職員 【助言】 総合演習担当教員 図書館 SA
国際関係 学部 1年生	入門セミナー	6回	デモ 原稿作成シート 原稿作成シート 原稿作成シート ビブリオバトル本番（前半） ビブリオバトル本番（後半）	【進行・助言】 、 、 図書館職員 ～ 入門セミナー 担当 教員

3 - 2 . 2014年度実践研究の振り返り

「本を読み、内容をまとめ、それを人に伝える」ことは、大学で学ぶ上で基礎的な学習スキルであり、「読む、聞く、書く、話す」といった総合力を養えると考え、取り組んだものの、何とか1冊の本を読み、原稿作成シートにあらずじや感想を書けた学生も、ビブリオバトルの制限時間を使いきるほど話すのは難しいようだった。とはいえ、「難しい」ということを実感してもらうための発表練習でもあり、難しさやできなかった自分の能力を知る、ということは「学び」の基本である。

話すのが得意な学生の中には、原稿作成シートが書けていなくても、時間を余らせることなく話せる者もいた。本学の場合、書くことも話すことも両方得意だという学生は少なく、原稿作成シートが書けなくて劣等感を感じている場合もあるため、まずは話せたことを褒めるようにした。その上で、発表内容にあらずだけでなく自分が考えたことを取り入れてみてはどうかといったアドバイスや、発表中に聴衆への問いかけやアイコンタクトを取り入れるなど、プ

レゼンテーションのテクニック向上につながるアドバイスをした。

また、原稿作成シートの書き方の指導では、一例として、学生に面白かった部分を話してもらった。そして「面白い」とは具体的にどういう感情になったのか、笑ったのか、感動したのか、悲しくなったのか、といったことを聞きながら感想を引き出した。原稿作成シートを全く書き進めることができない場合は、どういった登場人物が出てくるのか、主人公は誰か、主人公は何をしているのかなど5W1Hの質問をすることでそれをきっかけにシートの作成を促した⁽⁷⁾。

発表練習時には、「聴く」練習もした。まず、発表を聴く態度として傾聴力に関するプリントを配布し、態度や質問の仕方を説明した。発表を聴く者は、「発表分析シート」に発表者の良かった点と改善点を最低一つずつ書き、グループ内で情報を共有してもらった。その後、グループメンバーを変え、自分のグループで共有した情報を発表し合ってもらい、内容や発表態度について様々な意見を共有できるようにした⁽⁸⁾。

経済学部3年生のクラスは2年生の時にピブリオバトルを経験したことがある学生が多数だったため、プレゼンループリックの作成に取り組んでもらい、自律的にピブリオバトルに取り組んでもらうことを目標とした。「ループリックの内容を学生自身が作成することで、学生は学習活動における目標を強く意識して課題を進めるとともに、目標と自分の学習成果との関連に省察を行い、学生の自律的な学習態度を培う一助」となることを狙った⁽⁹⁾。ループリック作成にあたっては、学生に、どんな発表態度で臨み、どんな発表内容を入れれば効果的な本の紹介ができるか考えて付箋紙に書き出してもらい、内容ごとに仕分けしてもらった。それを元に図書館職員が表を作成し、「ピブリオバトル3段階評価シート」の形にして自己評価・相互評価の指標とした。

また、ピブリオバトルの発表準備では3回程度、学生の指導をする機会がある。その中で本を読めない・読まない理由は大きくわけて2つあると感じた。まず、学力の面からは「文章が分からない」、「漢字が読めない」、「言葉の意味

が分からない」といったことである。生活習慣の面からはアルバイトや部活で忙しく、授業の課題であっても読書に使う時間が取れない(取らない)といったことである。

4 - 1 . 事前・事後アンケートの分析

3 - 1 で述べた実施パターン(授業デザイン)を元にビブリオバトルを活用した授業を実践し、学生が授業の中で繰り返し「読む・書く・話す」の練習をすることで、「本を読むこと」「人前で話すこと」「文章を書くこと」に対する学生の意識が向上すると仮説を立てた。実施パターンにもあるように、本研究の効果を測るため、第1回目(デモンストレーション)では事前アンケートを、第5回目で事後アンケートをそれぞれおこない、ビブリオバトルの事前事後で学生の意識の変化を測った⁽¹⁰⁾。

アンケート名：ビブリオバトル事前アンケート、ビブリオバトル事後アンケート
目的：ビブリオバトルを使ったグループワークを体験することによって「本を読むこと」「人前で話すこと」「文章を書くこと」に対する学生の意識が向上するかどうかを測る。

方法：質問紙調査

「本を読むことが好き」「人前で話すことに抵抗がない」「文章を書くことが好き」の各設問について「まったく当てはまらない」から「非常に良く当てはまる」の5段階で回答を求め、「まったく当てはまらない」を1とし、「非常に良く当てはまる」を5とした。

対象：1年生の入門セミナー または2, 3年生の演習でビブリオバトルを活用したグループワークを体験した学生。

時期：2014年4月～10月

事前アンケートを各クラス、グループワーク第1回目の終了時に実施。
事後アンケートをグループワーク最後の回の終了時に実施。

サンプルサイズ：114（アンケート回答者254名。事前・事後アンケート両方回収できたものの内、有効回答数）

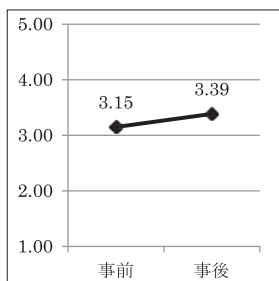
表7 回答者基本属性 (単位：人)

	1年生	2年生	3年生	合計
法学部	10	8	0	18
経済学部	39	7	5	51
国際関係学部	45	0	0	45
合計	94	15	5	114

母集団：2014年度1年生～3年生

ビブリオバトルに取り組むかどうかは、担当教員の裁量に委ねられており、学生の意思は反映されていない。

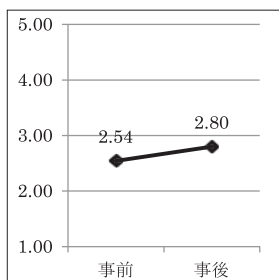
図1 「本を読むことが好き」に対する事前事後アンケートのポイントの平均の差異



「本を読むことが好き」に対する事前・事後のポイントの平均値の差に関するt-検定を行った結果

	事前	事後
平均	3.149	3.386
分散	1.562	1.602
観測数	114	114
仮説平均との差異	0.000	
自由度	113.000	
t	-2.468	
P (T < = t) 両側	0.015	
t境界値 両側	1.981	

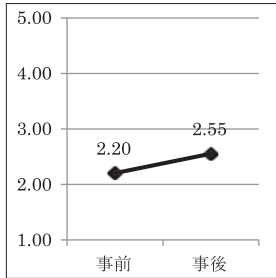
図2 「人前で話すことに抵抗がない」に対する事前事後アンケートのポイントの平均の差異



「人前で話すことに抵抗がない」に対する事前・事後のポイントの平均値の差に関するt-検定を行った結果

	事前	事後
平均	2.544	2.798
分散	1.578	1.508
観測数	114	114
仮説平均との差異	0.000	
自由度	113.000	
t	-2.166	
P (T < = t) 両側	0.032	
t境界値 両側	1.981	

図3 「文章を書くことが好き」に対する事前事後アンケートのポイントの平均の差異



「文章を書くことが好き」に対する事前・事後のポイントの平均値の差に関するt-検定を行った結果

	事前	事後
平均	2.202	2.553
分散	1.189	1.081
観測数	114.000	114.000
仮説平均との差異	0.000	
自由度	113.000	
t	-3.698	
P (T < = t) 両側	0.000	
t境界値 両側	1.981	

ビブリオバトルのワーク実施前後にアンケートをおこない、平均値を算出したところ、「本を読むことが好き」という設問では実施前では図1の通り、3.15、実施後では3.39となった。この二つの平均値の差が統計的に意味のある差かどうかを検定するためt検定を行った。その結果、実施後の平均値の方が有意に大きいという結果になった。(t(113) = 2.47, p < 0.05)

「人前で話すことに抵抗がない」という設問では図2の通り、実施前で2.54、実施後で2.80となった。この二つの平均値の差が統計的に意味のある差かどうかを検定するためt検定を行った。その結果、実施後の平均値の方が有意に大きいという結果になった。(t(113) = 2.16, p < 0.05)

「文章を書くことが好き」という設問では図3の通り、実施前で2.20、実施後で2.55となった。この二つの平均値の差が統計的に意味のある差かどうかを検定するためt検定を行った。その結果、実施後の平均値の方が有意に大きいという結果になった。(t(113) = 3.70, p < 0.05)

次に、各設問の事前アンケートのポイントが、事後アンケートでどう変化したか、また、事前アンケートで1～5を選択した学生のポイントが、事後アンケートでどう変化したのか、ポイント上昇、変動なし、下降の3つに分けてグラフで示した(図4, 5, 6)。

「本を読むことが好き」という意識に変化が生じるかどうかを測った設問で

は、ポイントが上昇した学生は29.8%、ポイントが下降した学生は15.8%いた。

「人前で話すことに抵抗がない」という意識に変化が生じるかどうかを測った設問では、ポイントが上昇した学生は34.2%、ポイントが下降した学生は20.2%いた。

「文章を書くことが好き」という意識に変化が生じるかどうかを測った設問では、ポイントが上昇した学生は37.7%、ポイントが下降した学生は14.0%いた。

また、細かく分析すると、事前アンケートで1および2を選択した学生のポイントの上昇が大きかった⁽¹¹⁾。中には事後アンケートで5を選択した学生もいる(表8, 9, 10)。例えば、表8より、設問「本を読むことが好き」では、事前アンケートで1を選択した学生の内、事後アンケートで5を選択した学生が2名いる。

以上の結果より、ピブリオバトルのワークを実施した後に、「本を読むこと」「人前で話すこと」「文章を書くこと」に対する学生の意識が向上したと言え

図4 事前アンケートのポイント別に「本を読むことが好き」に対する意識が上昇、下降した割合

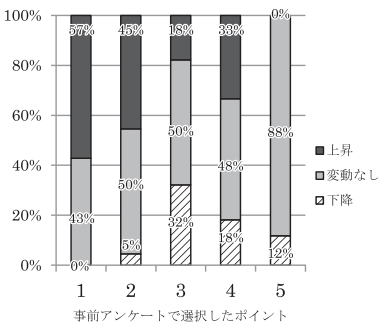


表8 設問「本を読むことが好き」に対する事前・事後のポイントの推移

	1	2	3	4	5	計
事前アンケートで選択したポイント						
1	6	3	2	1	2	14
2	1	11	6	3	1	22
3	1	8	14	5	0	28
4	0	2	4	16	11	33
5	0	0	1	1	15	17
計	8	24	27	26	29	114

↑ まったく当てはまらない
↓ 非常に良く当てはまる

図5 事前アンケートのポイント別に「人前で話すことに抵抗がない」に対する意識が上昇、下降した割合

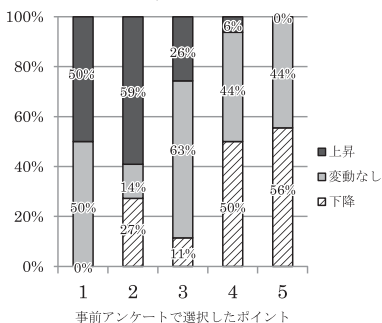


表9 設問「人前で話すことに抵抗がない」に対する事前・事後のポイントの推移

	1	2	3	4	5	計
1	16	8	4	2	2	32
2	6	3	7	6	0	22
3	1	3	22	6	3	35
4	1	0	7	7	1	16
5	1	0	4	0	4	9
計	25	14	44	21	10	114

事前アンケートで選択したポイント
 まったく当てはまらない
 ↑
 ↓
 非常に良く当てはまる

図6 事前アンケートのポイント別に「文章を書くことが好き」に対する意識が上昇、下降した割合

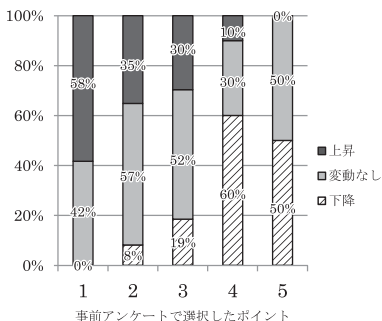


表10 設問「文章を書くことが好き」に対する事前・事後のポイントの推移

	1	2	3	4	5	計
1	15	11	9	0	1	36
2	3	21	8	5	0	37
3	0	5	14	8	0	27
4	1	0	5	3	1	10
5	0	0	2	0	2	4
計	19	37	38	16	4	114

事前アンケートで選択したポイント
 まったく当てはまらない
 ↑
 ↓
 非常に良く当てはまる

る⁽¹²⁾。特に事前アンケートでポイントが低かった学生の上昇の一因となったと推測できる。

4 - 2 . 追跡アンケートの実施と結果

「1.九州国際大学図書館の現状と課題」で述べた通り、学生が図書館の施設や資料を活用して、自発的な学びや本を読むきっかけにつながったかどうかを調査するため、紹介された本を読んだかどうかアンケートを実施した。

対象：2014年度にビブリオバトルを使ったグループワークを経験した学生

期間：2016年6月20日～7月2日

方法：Web アンケート

サンプルサイズ：19

表11 ビブリオバトルで紹介された本を読みましたか？

(上段：人、下段：%)

いいえ	14 (73.7)
はい	5 (26.3)
合計	19

表12 「はい」と答えた方に質問です。ビブリオバトル終了後、どれくらい経ってから読み始めましたか？(複数回答可)

(単位：人)

ビブリオバトル終了後1週間以内	1
ビブリオバトル終了後1ヶ月以内	3
ビブリオバトル終了後6ヶ月以内	1
合計	5

表13 「はい」と答えた方に質問です。読んだ本はどこで入手しましたか。(複数回答可)

(単位：人)

ビブリオバトルで本を紹介していた人から借りた	1
九州国際大学図書館で借りた	3
公立図書館で借りた	1
書店で買った	1
合計	6

表11より、ビブリオバトル経験後に、紹介された本を読んだ学生は26.3%であった。その内、1週間以内に読み始めた学生は1名、1週間以上経過後に読み始めた学生は4名であった(表12)。また、表13より、読んだ本の入手先として本学図書館を挙げている学生が多いことがわかる⁽¹³⁾。

事後アンケートの設問「ゼミ仲間が紹介した本を読みたいと思った」「少し当てはまる」「非常に良く当てはまる」と回答した学生が73%であったという結果⁽¹⁴⁾と比較すると、実際に読書につながる学生は少ないと推測されるが、「読みたい」という気持ちは比較的長く継続するようである。また、学生が『読みたい』と思った時に身近なところで本を手にとれるよう、紹介された本を蔵書として揃えておく必要性を感じた。

4 - 3 . アンケート結果の考察

4 - 1 で述べた事前事後アンケートの平均値や t 検定の結果より、ビブリオバトルを使った授業を通して、「本を読むこと」「人前で話すこと」「文章を書くこと」に対する学生の意識は上昇した。特に事前アンケートで選択肢 1 及び 2 を選択した学生の意識の向上が大きく、ボトムアップにつながり、授業の手法として取り入れたことはひとまず成功したといえる。意識が上昇した要因として推測されることは 3 つある。1 つ目は発表準備までの回数を設定し、各種シート類を使ったことで思考プロセスの可視化や発表内容をまとめることができたこと。2 つ目はグループ内で発表練習をおこない、本番の発表まで練習を重ねることができたこと。3 つ目は SA によるピアサポートを導入し、学生とより立場に近い SA から体験談やアドバイスを受けることができたこと。さらにこれら 3 つ以外にも授業で取り組んだことである種の強制力がはたらき、学生にとっては単位取得という、動機づけがなされたことはふれておく必要がある⁽¹⁵⁾。

学生のビブリオバトルを観察して、通常の授業では習得できない学びがあると感じた。入門セミナー や演習という小さなコミュニティに属する学生同士で、お互いが選んだ本を知ることができ、その本の面白さを体感することができる。それゆえ、ビブリオバトルのコンセプトである「本を通して人を知る、人を通して本を知る」は重要な意味を持つのである。

なお、追跡アンケートは回答数が少なかったため、事後アンケートの結果との単純な比較はできない。少ない回答数からいえることは、学生が本を手にとったのはビブリオバトル終了直後とは限らず、1 週間経過後～1 ヶ月、さらに 1 ヶ月以上経過して本を手にとった学生もいることである。今後の展望としては 2015～2016 年の実施状況もまとめ、また、ビブリオバトル実施後にさらに多くのサンプルを収集し、ビブリオバトルを授業で取り組む事が読書の動機づけとなっているかを明らかにしたい。

おわりに

2013年に始まった本学のビブリオバトルは今年で4年目を迎えた。当初は試験的に3つのゼミのみでスタートしたビブリオバトルの授業も、時とともに少しずつ理解が広まり、今では19のゼミで取り組んでいただけるまでになった。

とはいえ、もともとビブリオバトルは授業で行うことを企図したものではなく、図書館の存在を学生に意識してもらうためのイベントとして導入したものである。しかし何度か図書館で開催していくうちに、これは授業として行ってもかなり面白いのではないかと考えるようになった。ビブリオバトルの要素である、「本を読み、内容をまとめ、それを人に伝える」ことは、初年次入門セミナーの目標の一つでもあったからである。そこでわれわれは本来のビブリオバトルを推進しつつ、それを基に授業向けのビブリオバトルを開発することに決めた。この点において、本学のビブリオバトルに対する取り組みは極めてユニークであるといえるかもしれない。

ただ、ビブリオバトルを授業に耐えられるようにするためには、本来のビブリオバトルの良さを活かしつつ、授業としての要素をきちんと組み込んだものにデザインしなおす必要があり、その作業が容易ではなかった。その作業プロセスが今回の研究ノートの中核となっている。さまざまなモデルを作っては授業で試し、その結果を受けてさらに調整する。それを毎週繰り返しながら、5コマで1セット（1コマ90分）の標準授業モデルを作り上げるまでの作業は、まさに試行錯誤の連続であった。

また、この授業モデルを作り上げるにあたってはもう一つ大きな課題があった。それは、ビブリオバトルを授業に組み込む効果をどう数値化して示すかということであった。われわれは、アンケートの質問内容や結果の分析に当たっては統計を専門とする先生方のご指導を仰ぎながら、かなりの時間を費した。結論はシンプルに見えるかもしれないが、このシンプルな結論を得るために、

地道な作業が延々と続いたことをここに記しておきたい。

こうして仕上がった授業モデルをベースに毎年担当の先生方と入念な打ち合わせを行い、そのなかでそれぞれの授業の目的に応じて授業回数を増減し、最終的なスケジュールを決定、そして授業を実施する。このスケジュール調整と授業の実施がまた大変で、特に今年はビブリオバトルの授業を行うゼミが19にのぼったため、スケジュール調整はかなり難航した。しかし先生方のさまざまな配慮と図書館職員が一人何役もこなしてくれたことによって、なんとか無事に乗り切ることができた。

なぜここまでするのか。それは、ビブリオバトルの授業のもつ楽しさにあるのではないだろうか。

ビブリオバトルの授業では、担当教員、職員、学生アシスタント、さらには直接授業に関係のない教員なども聴衆として参加できるため、とても自由な雰囲気なか、参加者全員で一つの授業をつくっているという一体感を感じられるのである。このような授業スタイルは、教職協働を目指している本学にとって、一つのモデルになるのではないかと考えている。今後もこのような授業が増えていくことを心から願わずにはいられない。

とはいえ、この取り組みはまだ始まったばかりである。どうすればもっと楽しくて面白い授業にできるか、今もなお試行錯誤の日々が続いている。

そんななか、田川郡にある福智町立図書館の館長から小中学生たちにビブリオバトルの指導をしていただけないかという依頼を受けた。大学生ならまだしも、小中学生を対象としたビブリオバトルなどほとんど経験がないので、少々躊躇はしたが、思い切って引き受けることにした。ビブリオバトルは小中学生でも十分に楽しめるという確信がわれわれにはあったし、またこの機会に新たな可能性を開くことができるのではないかと考えたのである。しかし、小中学校向けに授業デザインを作り直すのは想像以上に大変であった。それでも関係者が粘り強く打ち合わせを重ね、授業開始前になんとか最終的なデザインの完成にこぎつけることができた。

初の試みということで、今年は中学校1校、小学校2校（1校はビブリオバトルの準備段階としてのポップづくりにチャレンジ）で実施することになった。ただし、これまでのビブリオバトルとは大きく異なる点があった。小中学校で指導を行うのは、われわれ教職員ではなく、本学の学生たちが行ったという点である。学生たちは、われわれの心配をよそに、初日のデモから最終日の成果発表にいたるまで実に楽しそうに児童・生徒と関わっていた。彼らに接するときの優しさや気配り、指導する際のアドバイスの的確さに対して、小中学校の先生方からお褒めの言葉をいただいた。そして本番当日、会場は大きな歓声と拍手に包まれ、どの顔にも笑みがあふれた。この日は本学のビブリオバトルが新たな一歩を踏み出した記念すべき一日となった。

これらの取り組みを通じて感じたことは、授業を成功に導くにはしっかりとしたデザインが必要であり、しっかりとしたデザインに仕上げるには関係者の粘り強い取り組みが必要である、ということである。福智町から始まったこのビブリオバトルが少しずつ理解を得、その輪が静かに広がることを期待したい。

今回は頁数の関係で、前半の2年間の取り組みの内容を報告するとともに、それに関連するいくつかの考察を載せるととどめた。今後機会があれば、後半2年間の取り組みと、さらには今年から始まった福智町における小中学校の授業支援についても報告できればと考えている。

謝辞

本稿の執筆にあたり、九州大学基幹教育院山田政寛准教授、ならびに研究ゼミの皆様から有益なご助言をいただきました。また、事前・事後アンケートの分析方法については、本学法学部石崎千景准教授にご助言をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます⁽¹⁶⁾。

学生用・事前アンケート

年 月 日

担当教員		学籍番号		氏名	
------	--	------	--	----	--

下記の質問について、当てはまる番号を1つ選び、○をつけてください。

設問番号	設問	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	少し当てはまる	非常に良く当てはまる
1	ビブリオバトルを知っている。	1	/	/	/	5
2	本を読むことが好き。	1	2	3	4	5
3	人前で話すことに抵抗がない。	1	2	3	4	5
4	文章を書くことが好き。	1	2	3	4	5

学生用・事後アンケート

年 月 日

担当教員		学籍番号		氏名	
グループ名		グループ・メンバー			

下記の質問について、当てはまる番号を1つ選び、○をつけてください。

設問番号	設問	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらともいえない	少し当てはまる	非常に良く当てはまる
1	本を読むことが好き。	1	2	3	4	5
2	人前で話すことに抵抗がない。	1	2	3	4	5
3	文章を書くことが好き。	1	2	3	4	5

●ビブリオバトルをやってみてどうでしたか？

4	グループワークの内容を発表に活かすことができた。	1	2	3	4	5
5	レジュメシートを使うことで自分の考えをスムーズにまとめることができた。	1	2	3	4	5
6	ディスカッションタイムに質問できた。(グループワーク含む)	1	/	/	/	5
7	ビブリオバトルで発表できて楽しかった。	1	2	3	4	5
8	ビブリオバトルでゼミ仲間の発表を聞くことができて楽しかった。	1	2	3	4	5
9	ビブリオバトルで新しい本と出会えて良かった。	1	2	3	4	5
10	ゼミ仲間が紹介した本を読んでみたいと思った。	1	2	3	4	5
11	ビブリオバトルで友達の一部を知る事ができた。	1	2	3	4	5
12	ビブリオバトルをまたやってみたい。	1	2	3	4	5

質問12で 4(少し当てはまる)、5(非常に良く当てはまる)に○をつけた方に聞きます。

ビブリオバトルをやるとしたら、どのような形でやりたいですか？

あてはまるもの 全てに ○をつけてください。
 ① ゼミ・授業の中で ② 友達と自主的に ③ 大会に出たい
 ④ その他 ()

14 ビブリオバトル第1回～今日まで、授業以外で図書館に来ましたか。

①はい ②はい

15 質問4で ②はいに○をつけた方は、回数を教えてください。(だいたいでも良いです)

ビブリオバトルの準備のため ()回 それ以外の目的のため ()回

注

- (1) 「大学図書館の整備について（審議まとめ）」でも学習支援及び教育活動への直接関与についてふれられているように、単なる資料の収集、整理、保存だけでなく、本学図書館でもより深いレベルで教育に関わり、取り組んでいく必要がでてきた（求められている）。
- (2) ビブリオバトル普及委員会編著（2013）『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』情報科学技術協会 pp6 7
- (3) 谷口忠大（2013）『ビブリオバトル：本を知り人を知る書評ゲーム』（文春新書 901）文藝春秋 pp95 97
ビブリオバトルの機能については、ビブリオバトル考案者谷口忠大による論文がある。
谷口忠大、川上浩司、片井修（2009）「ビブリオバトル：書評で繋がりを生成するインタフェースの構築」『ヒューマンインターフェースシンポジウム 2009』CD-ROM
また、ビブリオバトル普及委員会によるビブリオバトル公式ガイドブックでも解説されている。
「須藤秀紹「ビブリオバトルの科学」ビブリオバトル普及委員会編著（2013）『ビブリオバトル入門：本を通して人を知る・人を通して本を知る』pp114 134 情報科学技術協会
- (4) 2013年度のオープンキャンパスでビブリオバトルを観覧した高校生が2014年に入学して、担当教員に「自分もビブリオバトルをやりたい」と申し出たこともあった。
- (5) 入門セミナーの授業内容は、学部ごとにある程度のことが決められているが、担当教員による裁量も大きい。この点はビブリオバトルを導入しやすい環境につながり、本研究を行う上での重要な要素でもあった。
- (6) 2年生以上のクラスや司書教諭科目のクラスは公式な案内はせず、担当教員の希望により実施した。
- (7) 原稿作成シートの書き方の指導については、国際関係学部松井貴英教授にSD研修をお願いした。
- (8) 山崎紅（2012）『求められる人材になるための社会人基礎力講座』日経 BP 社
- (9) 遠海友紀，村上正行，梅本貴豊 [他]（2014）「自律的な学習を促すことを目指した論証文作成の授業の効果」『日本教育工学会研究報告集』3，pp.13 20
その他、プレゼンループリック作成及び学生の相互評価に関しては以下を参考

にした。

河野昭彦, 斉藤博嗣, 佐々木大輔, 平澤一樹, 須田達, 鶴谷奈津子(2013)「9
- 215学生の相互評価によるアクティブラーニング型授業(Ⅰ): プレゼン
テーションの向上を目指す取り組み((04)工学教育の個性化・活性化
- III)」工学教育研究講演会講演論文集平成25年度(61), pp 482-483, 公
益社団法人日本工学教育協会

東北福祉大学「リエゾンゼミⅠ プレゼンテーションルーブリック」

http://www.tfu.ac.jp/campuslife/pdf/rubric_liaison_presentation.pdf (参照
2014.10.11)

堀口秀嗣(2001)「プレゼンテーションの視点」, 『年会論文集』(17), pp.18
- 19, 日本教育情報学会

森朋子「授業/カリキュラムをデザインする」

<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fd/seika/proj3/files/101208.pdf> (国立大学法人島
根大学教育開発センター「[2010年12月08日]第1回ランチョンFDを開
催しました。」平成21年度文部科学省特別教育研究「学生の学びを中心
に据えた教職員ネットワークの構築とFDの組織化～山陰地域のFD拠点化
に向けて～」活動成果 プロジェクト3

<http://cerd.shimane-u.ac.jp/fd/seika/index.html#anc-proj3>)(参照 2016.6
1)

山本恭子, 河野浩之(2010)「学生の相互評価によるプレゼンテーション能力
向上」『論文誌 ICT活用教育方法研究』13(1), pp.46-50, 私立大学情
報教育協会

- (10) アンケート項目の改善や使用したツール類の評価については今後の研究課題と
したい。
- (11) 今回準備した設問では、事前アンケートで1を選択した学生の意識の低下、事
前アンケートで5を選択した学生の意識の向上については測れないため、事後
アンケートの設問の改善が課題である。
- (12) いくつかのクラスでは基本となる実施パターンをカスタマイズしており、取り
組んだクラスが全て同じ内容で実施していない点、さらに、ビブリオバトルを
使った授業を受講する間に、他の講義でも「読む・書く・話す」といった能力
向上に関連する学習をしており、本研究単独の成果ではない点、これら2点に
は留意する必要がある。
- (13) 追跡アンケートを実施した時期については、ビブリオバトル実施から2年が経
過していたこともあり、十分なサンプルサイズを集めることができなかった。
追跡アンケートの実施時期や方法について改善が必要である。

- (14) 九州国際大学図書館（2015）『2014年度私立大学図書館協会研究助成「機関研究」報告書教職協働で作る学修支援 - ビブリオバトルの手法を活用したグループワークと読書ノートの構築 - 』p18
<http://www.jaspul.org/ind/asset/docs/hokoku2014-kyukoku.pdf>（参照 2016 10 14）
- (15) 正課授業での取り組み、とりわけ演習の授業で実践研究がおこなえる環境は、他大学から驚かれる理由の一つであると同時に本学の強みである。
- (16) 本稿は、2014年度私立大学図書館協会研究助成報告書をベースに、新しい視点やアンケート分析を加え、構成し、まとめている。